

団地／それぞれの住まい歴調査研究

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

AUGUST
2013
VOL. 116

■住まい手を知る

団地再編。

社会、地域、自然の大観を理解しこれからを構想することも一つの大切な柱である。

しかし何より、住まい手・人を知ることから始まる。人の生、そして住まい。それぞれの思い、出会い、沢山のドラマ。

多数の住まい手の人生が一時的に束ねられた団地の現在、この場所。

一見、均質に押し込められた景観。

その背後に、それぞれの人生の時系列、生家、育ち、結婚など暮らしや住まいの変遷、無数の固有の文脈が息づいている。

■現在の一般的な方法

一方、近代以降我々の住環境の方法は高度化と共に合理化が進んできた。

現在の集住環境計画の現場では、住まい手の把握とはまず、属性・統計・アンケート・類型化・「像」化、そして代表者からの意見などが主として形作られる。

近年、住民ワークショップの方法が取り入れられているが、特定の参加者や話し上手、声の大きい一部の方の意見が強かったり、フリートークでの意見やポストイットなどは整理され、傾向が集約化され、最終的には既視感のあるバランスに収斂してしまう。住まい手側も、既存の視点がプリントされている傾向も見られる。

近代主義とは、経済や政治・行政のみならず、暮らしや計画設計のプロセスまで全ての情報を、交換・流通可能な抽象的・記号的様態へと洗い落としてしまう側面を持っている。

■その結果として

そういう側面と相まって、我が国の住環境は以下のような傾向へと進みつつある。

(1) 生活空間の中間的領域が抜け落ちていく

民俗学者柳田国男に“軒遊び”という言葉がある(分類児童語彙 1949)。赤ん坊から子供への過渡期、母親に近く且つ外界との接点領域で、健全に豊かな感受性ある人間を形成してきた。また、一昔前の農家や都市

の長屋などは、縁側や路地・庭先など、高齢者になるだけ自分の家で人生を最後まで豊かに安心して過ごすための小世界を形成していた。

このように日本の伝統的な住空間はある程度の複雑さと奥ゆきのある領域が家から街までを柔かくつないでいた。家人と街の人とが適度に触れ合える快適な関係により、幼児や子供、老人が、家族だけでなく身近に共存し、それが人間形成の潜在的な教育にもなっていた。そのような中間的領域が近現代の住環境づくりから抜け落ちて行く傾向にある。

(2) 個々人の感性や冗長性が消され基準が一律化されていく

日本では古来から、住まい手が住まい空間に対して自ら考え、手を掛けてきた。四季の快適環境のための簾や障子、水打ちや道の掃除などを通して、日常の細やかなドラマや感受性が保たれてきた。そういった環境や近隣などの「場所」との関わりが深いほど、人間としてのアイデンティティ(自分という人間の居場所や固有性)の確立が得られやすいのは、精神医学など様々な分野でもいわれている。

また、住まい手の個性や身体性が、なんとかしてしまう工夫や努力・我慢・メリハリのような Redundancy (冗長性・多様な解・余裕・韌性・有機性)の要素が住環境から抜け落ちて行き、記号的パラメーターだけで住空間が並べたてられていく。

このように団地など住環境には、住まい手の意識で気づいている事と実は気づいていない事がありうる。よって、生きられたこと(「生きられた家」多木浩二 1976)と、(生きられたはずのことが)生きられなかったことがある。事業者、為政者、計画設計や建設の業務者、それぞれは個別の目的を持っており、それに即さないノイズ(彼らにとっては)要素を指摘し現前化はしない。

そのために、我々研究者や建築家等の専門家は、住まい手の立場に立って、住まい手自身も気づいていなかったような、しかも彼らの人生、地域や社会の未来にとって大切な事を、代わって／共に発見し、住まい環境に取り入れて行くことが必要である。

■そのために——本研究の骨子

こぼれおちる物の中に大切な固有の情報がありうるため、なるだけこぼれおちない、整理せず枝葉や毛細根や泥を残したままの素材を、加工せずに保存していきたい。

具体の住まい手一人一人の深層（暮らしの経緯や記憶）にある居住環境に関わる潜在的な大事な要素を、専門家が対話して引き出し発見する。いわば個々人の深層世界のフィールドサーヴェイを行い、真の欲求とそこででの可能性を見出し、社会的合意を刺激し新しく形成することを目指したい。

（１）対話（ヒヤリング）の相手

対象は団地住民。属性や居住経歴や年数は限定しない。全て違うそれぞれなりの居住と空間がある。

特に、長い居住歴の方や子育て中や老後生活の方など、場所と生活の密接な人との対話は重視する。レスポンスは究極には一人が望ましいが、自然な“問わず語り”や“寝物語”の形式による記憶のたどり出しが理想である。それが自然にできるまではフランクな方法をとっていく。

（２）方法

方法はシンプルで、対話の相手に団地の暮らしを思い出して描写し語って貰う。細かすぎたり断片的であったり偏向的で構わない。ヒヤリングとは言っても詰問的であったり質問事項を押し付けたりせず、目的となる専門的な話題や言語に一切誘導してはならない。そうでない場所にこそ真実が隠されている。シー

トや方法など用意せず、専門家がリアルタイムに住まい手一人と対話を重ねる。対話の相手による問わず語り・寝物語的な会話を基本としインタビュアーは聞き役に徹する。

その専門家の聞きとる創造力（経験・知識・思考に裏付けられた）が唯一の方法論でありアンケートシートに代わるものである。その能力は、誘導するのでなくなるだけ消えている、被験者の思い出しを自然に展開して頂くことを邪魔しないことに注がれる。

（３）効果や結論

結論や使い道はこの研究では提示しない。（例示はする予定である）

研究の成果は生の素材そのものである。

結論や使い道は場所・地域・社会性・経緯など千差万別な「それぞれの現場」にて、固有の発見・抽出あるいは物語化が行われなければならない。

注）詳細なインタビュー記録は本プロジェクトのHPに掲載しています。<http://ksdp.jimdo.com/>にアクセスし、「団地／それぞれの住まい歴調査」に進んでください。

団地／それぞれの住まい歴調査一覧

	1回目	2回目	3回目	4回目
日時	2013年3月5日 15:30～16:30	2013年3月28日 15:00～16:30	2013年5月8日 15:00～17:00	2013年8月7日 15:00～17:00
場所	UR 男山団地中央センター 喫茶店	UR 男山団地中央センター 喫茶店	UR 男山団地中央センター 喫茶店	UR 男山団地中央センター 喫茶店
対象者	70歳代女性 20歳代男性	60歳代女性	60歳代女性	60歳代女性
居住地	UR 男山団地C地区	UR 男山団地C地区	UR 男山団地C地区	UR 男山団地C地区
すまい歴	約13年	約33年	約35年	約37年

『団地／それぞれの住まい歴調査研究』

執筆：安原 秀（OLAの会）
星田 逸郎（星田逸郎空間都市研究所）
作成・協力：倉知 徹（関西大学 先端科学技術推進機構）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

発行：2013年8月

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室
Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)
URL : <http://ksdp.jimdo.com/>